

作品募集

あなたの体験

想いをことばに

第22回

ふく、い、

風花

随筆文学賞



福井城址・山里口御門 (福井市)

風花とは雪が舞い散る様子を花に例えたもの。
この文学賞は、福井県出身の作家津村節子氏の随筆集『風花の街から』に

特別審査委員長 津村 節子

1928年 福井市に生まれる。
1965年「玩具」で第53回芥川賞、1990年「流星雨」で第29回女流文学賞、1998年「智恵子飛ぶ」で第48回芸術選奨文部大臣賞を受賞、2003年長年にわたる作家としての業績に対して第59回恩賜賞・日本藝術院賞受賞。日本藝術院会員。2011年「異郷」で第37回川端康成文学賞、「紅梅」で第59回菊池真賞を受賞。2016年文化功労者。著書にふるさと五部作の「炎の舞い」「遅咲きの梅」「白百合の崖」「花がたみ」「絹扇」ほか多数ある。

募集要項

- 内容 随筆(エッセイ)
 - ・テーマは自由(人とのふれあい、家族や旅の思い出、ふるさとへの思い、世の中の動きについて考えたことなど)
- 応募資格 高校生以上
- 応募料 無料
- 応募規定
 - ・A4判400字詰原稿用紙3~5枚以内(ワープロ可ですが、400字詰原稿用紙に換算して3~5枚に収まっているかを必ず確認してください)
 - ・作品は日本語で書かれた自作、未発表のもの。新聞、雑誌、同人雑誌、インターネット上などに既に発表したもの、他の文学賞に応募したものは不可とします。
 - ・作品とは別に表紙を付け、題名、氏名(ペンネーム可ですが本名・ふりがなも併記してください)、性別、住所、職業または学校名、年齢または学年、電話番号、公募を知った方法を明記してください。
 - ・応募は直接福井県ふるさと文学館カウンターへ持参するか、郵送または電子メールに限ります。(電子メールによる場合は、作品を別ファイルで添付してください。PDF可)※応募作品の返却および選考経過についての問合せには応じません。
- 締切
 - 〈一般の部〉平成30年10月31日(水) 当日消印有効
 - 〈高校生の部〉平成30年12月14日(金) 当日消印有効
- 発表 平成31年3月上旬ごろ
(入賞者に直接通知するとともに、福井新聞紙上にて発表します。なお、発表後、ホームページ上に入賞者名を掲載します。)

- 著作権 入賞作品の諸権利は、主催者側に帰属するものとします。(入賞作品は、本文学賞の趣旨に沿って、入賞作品集や新聞、主催・共催団体等のホームページ・広報誌等で公表されます。)
- 審査委員
 - 特別審査委員長 津村 節子(作家)
 - 委員 増永 迪男(山岳エッセイスト)
 - 中島 美千代(作家)
 - 大河 晴美(仁愛大学人間学部教授)
 - 泉 志穂(福井新聞社文化生活部長)
 - 向井 清和(福井県高等学校文化連盟代表)
- 賞

〈一般の部〉	最優秀賞	1名	30万円
	優秀賞	若干名	5万円
	U30賞	1名	5万円
〈高校生の部〉	最優秀賞	1名	10万円(図書カード)
	優秀賞	若干名	3万円(図書カード)
	佳作	若干名	5千円(図書カード)
	奨励賞	20名程度	3千円(図書カード)

応募先

〒918-8113 福井市下馬町51-11
ふくい風花随筆文学賞実行委員会事務局(福井県ふるさと文学館内) 宛
TEL (0776) 33-8866 Eメール: kazahana@pref.fukui.lg.jp
URL: <http://www.library-archives.pref.fukui.jp/>

裏面に入賞作品を掲載しております。

入賞作品の紹介

第二十一回 ふうい風花随筆文学賞

高校生の部 最優秀賞・福井県知事賞

あの日の誓い

群馬県 高崎健康福祉大学高崎高等学校

秋山 瑞希

彼女の純粋な眼差しを見てみると、大好きな中原中也の詩の一節が頭に浮かぶ。

『この小っちゃな脳味噌のために／道の平らかならなことを…』

この子を守るだけの力が欲しい。一刻も早く精神的に自立した人間になりたい。そんな想いから、迷い焦っていた時期があった。自分の至らなさに苛立ち、ささくれだっていた私の心を癒してくれたのも、いつもそばに居てくれる、尻尾が生えた末っ子の愛らしい姿だった。

中学校に入学し、ようやく新しい環境に慣れ始めた頃の出来事だ。晩春とはいえ、やはり朝夕は冷え込む。部活帰りの夕間暮れに、背中を丸めながら家路を急いでいると、風の音に混じって何処からか小さな鳴き声が聞こえた気がした。もし友達と連れ立って歩いていたら、聞き逃してしまっただであらう弱々しい声だ。

周りを見渡すと、通い慣れた通学路の景色には不相应と感ずる籐籠が置いてあり、その中で子猫が震えていた。私の手のひらより小さく、まだ目も開いていない。

母曰く「捨ててはいけない時期に棄てられた猫」だった。今にも消え入りそうな、あまりに儚く無防備な命を前にして、私は只々、狼狽えるばかりだった。そして気付いた時には子猫を抱いて家へと走っていた。私に出来ることは、泣きながら母に助けを乞うことだけだったからだ。

我が家にはすでに4匹の猫が家族として暮らしており、出処はすべて捨て猫や野良猫だ。無断でまた子猫を拾ってきたら私には、ひよっとしたら叱られてしまふのではと、身を硬くしたのだが、母にとつての最優先事項は、私に小言を言うことではなく、目の前にある小さな命を救うことだった。

母はすぐに、猫用のミルクと哺乳瓶を買いに走り、子猫を育て始めた。知り合いの獣医さんに相談すると「生まれたばかりの猫は子猫同士で団子になって体温が下がるのを防ぐので、一匹では死んでしまう」と言われたらしい。

それから母の奮闘が始まった。お湯を入れた小さなペットボトルをタオルでくるみ、子猫の周りを囲むように配置して、夜中であろうと数時間置きにお湯を入れ替える作業を毎日続けたのだ。タオルには兄弟猫の絵を描く念の入れようだ。

子猫を保護してから数日が経ち、命の危機を脱したと思われた頃、うやむやにしたまま胸に聞えていた問いの答えを、私はためらいがちに母に求めた。

「この子、うちで飼えるかな…」

動物を飼うということは、最期まで命に対する責任を全うするということだ。母は生き物の世話に決して手を抜かない人だと知っていたので、家計への負担を子どもなりに気にしていたのだ。餌代はもちろん避妊手術や毎年の混合ワクチン、毎月投与するノミ・ダニの駆除薬、7才を過ぎた猫には定期的な健康診断と、

猫が一匹増える毎に本当に多くの費用がかかることになる。トイレ用の猫砂だけでも馬鹿に出来ない出費なのだ。

そんな私の気持ちも、母には全てお見通しだったのだろう。眠っている子猫を起さないうよう、首のあたりをそっと撫でながら、静やかに独り言のような声で母が言った。

「大丈夫。ペットが増えて、飢え死にした人なんていないよ。」

私は安堵感と、私の心配を見透かし、氣遣ってくれた母のやさしさに、思わず泣き出しそうになるのを堪えながら「名前は私が決めていいでしょ」と、はしゃいでみせた。

献身的な愛育のおかげで、子猫はその後もすくすく育ち、4才の成猫となった今でも母の後ろを追って歩いている。普通の猫よりも、ひと回り身体が小さいメイ。少し気が弱く他の猫に馴染めないメイ。メイにとつて母親は人間である私の母で、いっしょに育った兄弟はタオルに書かれていた猫なのかも知れない。

今、小首を傾げ大きな瞳で私を見つめている彼女は、その心の奥底で何を想っているのだろう。「この家に連れてきてくれてありがとう」と、感謝してくれているだろうか。それとも「おまえは何もしてくれなかった」と、無力だった私を蔑んでいるのだろうか。

矢車の音が空に響く季節になると、あの頃のことを思い出し、これまでの生き方を振り返って自分を戒める。あの日、命を運んだのは私だが、命を救ったのは母だった。私は母に、ただ命を丸投げしただけだった。

あれから私は変わったのだろうか。命に責任が持てる人間になりたいと切望し、涙したあの時から少しは成長できただろうか。

入賞作品の紹介

第二十一回 ふうい風花随筆文学賞

一般の部 最優秀賞・福井県知事賞

野辺送り

香川県 中村 千代子

幼稚園から走って帰ると、父と母は庭いっばいに糊を干していた。

「うちなあ、お遊戯会で絵日傘を踊るんで。あしたから赤いべべ持って行かないかんわ」

母に跳びついて言った。父もニコニコ笑って頭を撫でてくれた。

その晩、父は私を膝の上に乗せると顔をのぞき込むようにして言った。

「あのかなあ千代子、うちは貧乏やけに赤いべべがないんじゃ。父ちゃん、あした幼稚園に行つて先生に千代子の踊り変えて貰うわ」

私は、「いやや」と叫んで隣の部屋に駆け込み、いつまでも泣いていた。

翌日は、父に手をつながれて幼稚園に行った。

「千代子ちゃん、かわいい魚屋さんを踊ろうね。青い法被着て、豆しほりするんよ」

先生がブランコを押してくれながら言う。昨夜泣いたのはもう忘れ、私は元気いっばい魚屋さんになって踊っていた。

母が亡くなったのは、お遊戯会が済んで十日も経たない寒い朝だった。風邪をこじらせ一夜入院しただけのあつけない死であった。

野辺送りには、赤い着物を着せてもらい、一番上の姉に手を引かれてついて行った。

「この赤いべべ、どうしたん？」

姉に聞いた。

「赤いべべ着とつたら、お母ちゃん喜ぶやろ」

姉は涙を流しながら言った。当時、女の子は赤い振袖で葬儀に参列する風習があった。

私は赤い着物を着たのが嬉しくて、飛び跳ねながら行列について行った。山の麓の火葬場は木々に覆われて薄暗い。母の柩は、藁を積み薪を組んだ上に逆さまに置かれた。

「逆さまにしたら、お母ちゃん、頭が痛いやろ」

私は、父にすがりついて泣いた。

藁束に火がつけられ、北風にあおられた炎は、あつという間に母の棺桶を包んだ。

その晩、二人の兄と二人の姉は寒い六畳間で抱き合っていて泣いていた。父は座敷で母の遺骨を見ながら酒を飲んでいて。私は赤い着物を着たまま、みんなの顔がうかがっていた。もう、母は帰って来ないという事など分かっていなかった。

「お父ちゃん、うち赤いべべ着とるけに絵日傘を踊ろうか。覚えとんで」

酒臭い父の顔をのぞき込みながら言った。

「ほうか、覚えとんか。ほんだら、踊ってくれ。父ちゃんが傘を取つて来てやるけん」

父は破れた番傘を持ってきた。私は自分で絵日傘の歌を歌いながら、座敷中を駆け回った。大きな傘に足をとられながら、何度も何度も踊った。

父は私を抱き寄せて独り言のように言った。

「こんなことになるんなら、早よう着物を買ったら良かったのう。お母ちゃんにも、絵日傘の踊りを見せて

やれたののう」

いつも賑やかな座敷は物音ひとつしなかった。

父は、私の結婚式を二ヵ月後に控えた夏の暑い日に母のところに行った。

母の野辺送りをした時、私の手を引いてくれた姉は八十七歳になり、遠い福岡で暮らしている。

「みんなと遠く離れて寂しいわ」

よく電話がかかる。

十六歳違う姉に、以前から聞いてみたいことがあった。母の野辺送りで着た赤い着物のことである。

「あの着物を用意するの大変だったのよ」

姉がゆっくり語り始めた。

お母さんが急に亡くなり、あなたに着せる着物のことを、長尾の叔母さんに相談したのよ。一晩で用意しないといけないから慌てたわ。あちこちの呉服屋さんを訪ねて……

「叔母さんのお陰でどうにか間にあつてね。お父さんはお金が無くて、私の貯金で払ったのよ」

姉は、私を傷つけまいと気を遣いながら話してくれた。父の酒臭い息を思い出した。強い北風が吹きつけた野辺送りの景色も浮かんでくる。白い行列の中ほどを担がれていく丸い母の柩。草の小道にリュウノヒゲの実が瑠璃色に輝いていた。母とよく歩いた坂道の曲がり角には、ひとかたまりの黄色い小菊が揺れていた。

まだ五歳だったのに、どうしてこんなに覚えていたのだろうか。不思議でならない。

あの時の赤い着物はどこへ行ったのだろうか。いつ無くなったのかも分からない。

野辺送りをした坂道や山裾は削られ、広い幹線道路が走っている。火葬場だった傍らで眠る父と母。もうすぐ寒い冬が来る。